



W.A. Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第47号

フクロウ聖人の高笑い

モーツァルトへの手紙 (その23)

会員番号 K.618 加藤 明



ああ、「コロナウイルス」という世界的な災難の次は「ウクライナ」!

モーツァルトよ、人類はあなたが天に召されて230年も経過した21世紀の今日も、「戦争」という古典的悲劇から脱皮できないでいるのです。

パンデミックへの対処法がようやく見えてきたかと思ったら、大国ロシアがしかけた無謀かつ絶望的な戦争。この「絶望」の本質は「誰しもが当事者になり切れない」という、底抜けの無力感に相違ないように思われるのです。

毎日のように流されるウクライナの極限的な被災状態を観せつけられて、「オマエハ イマドウシテ ココニ イルノカ?」という自問とその繰り返しが無力感の実相ではあるまいか・・・。

戦争の前に (パンデミックもそうでしたが) あらゆる芸術という営みはすっかり影を潜めてしまい、とりわけ音楽という奏者と視聴者の一体的な時間芸術にあっては世界の片隅に追いやられて、為すすべを見失ってしまった感があります。

そんな状況下、小生はどうにか往復75キロのマイカー通勤という日常が保たれていることに、

それまでとは異なった感謝の念を懐くようになりました。

厳しかった冬を越し、五月晴れの緑の山々を拝みながらの小ドライブ通勤。

車内で、あなたをはじめ無数の作曲家の名曲を聴き続けることができる、そんな何物にも代えがたい贅沢な日常体験はいまも途絶えていないのですから・・・。



今日もまた五月晴れに恵まれるなか、名手アラン・シヴィルがクレンペラーと協演した味わい深いモーツァルトのホルン協奏曲集 (1961年盤) を愉しみながら五城目町に向かいました (この中のK.412は正に絶品ですから・・・)。

ご承知のように、この4曲の協奏曲 (五重奏曲もそうですが) はザルツブルク時代からの演奏仲間であるウィーンでチーズの販売業を営んでいたイグナーツ・ロイトゲープのために作曲された、という創作上の動機があります。

実はロイトゲープその人は、ザルツブルク宮廷楽団のホルン奏者として1778年、モーツァルトがパリ・マンハイムへの就職旅行にお母さん

と出かけるころまでは、一緒に宮廷の内外で演奏していた親しい間柄だったのです。

その後、ロイトゲープはウィーンに移り住み、モーツァルトが「独立」を決意しウィーンに移り住んだ1781年以降に運命の再会を果たしたのです。

そのような奇縁が1783年5月に作曲されたK.417変ホ長調から最晩年の作品K.412ニ長調(俗にいう「サヨナラ音楽」)まで4曲の協奏曲等の名曲がこの世に贈りだされたのです。

つまり、ロイトゲープとの予期せぬ再会がなければ生まれなかった、という真実(そしてその意味も)を後世の我々が認識できる特異な協奏曲なのです。

ただ、面白いのは、モーツァルトとロイトゲープとの年齢の差です。

なんと、ロイトゲープがモーツァルトよりも21歳も年上であったことでした。

そして、さらに面白いのは、モーツァルトがこの旧知の大先輩に対して、親し気に、聞き捨てならないほどの悪ふざけぶりで接していた、という事実です。

因みに最初の曲、K.417の自筆譜の標題には「ウォルフガング・モーツァルト、ろば、牡牛、馬鹿のロイトゲープを憐れむ」といった書付けがあり、モーツァルトらしい辛辣なジョークで彼のユーモア精神を彷彿とさせているのです。

このような自分の父親ほどの大先輩(当時ロイトゲープ48歳、モーツァルト27歳)に対する接し方から、ロイトゲープというホルンの名手の寡黙で温厚な人柄が偲ばれて、なんとも面白いやら可笑しいやらで……。

ご承知のように、モーツァルトは1791年の12月に35歳で亡くなっていますが、ロイトゲープ

おじさんの方は1811年に76歳という当時としては驚くほどの大往生を遂げているところから推測して、とても前向きでエネルギッシュな側面をもった明るい好漢だった、と想われますが、うがち過ぎでしょうか。

36歳の誕生日を間近に控えていたモーツァルトに、年齢を超えた友情を懐かせ、真の「有終の美」となるホルン協奏曲K.412を書かせたロイトゲープ。

あのR・V・ケッヒエルをして誤って「1番」という番号を付けさせたほど生き生きとして清純、どこか懐かしく哀し気なモーツァルトの代表的な名曲を、彼の死後、ロイトゲープがいつどこで初演したのか、その記録はありません(たぶん)。

言えることは、ロイトゲープが最後のスコアを目の当たりにして、激しい衝撃のなか、気丈にもモーツァルトがこの曲に込めたであろう意思を全うに会得し、感動的にホルンをうならせたに違いない、ということです(涕泣のロイトゲープを想う)。



ところで、昨年(2019年)の年の瀬に小生も掛け替えない親友(いや心友)を失いました。

タカハシミチオさん、通称「フクロウおじさん」その人です。享年85歳。

小生とはわずか5年ほどの短いお付き合いでしたが、出逢ってから彼の最期までの濃密な関わり方は、ほんとに誇らしく発展的で有意義かつ楽しいものでした。

職人氣質、寡黙でカラカラと大きな声で笑う親愛の情こまやかな大先輩でした。

もともとは若い頃から腕の立つ大工職人として活躍してきたタカハシさんが、動機は不明な

がら古希を境につぎつぎと得意のチェーンソーを道具とした木製「フクロウ」を製作し、方々の道の駅などで販売するようになりました。

小生の勤める道の駅にも4年前の赴任早々に挨拶にみえて、店頭で愛嬌たっぷりのフクロウを並べては、お客さんに朗らかな笑顔で飄々と説明をしながら供する姿が脳裡に焼き付いております（フクロウたちのつぶらな眼は彼の眼そのものでした）。

タカハシさんの凄いところは、①フクロウという夜行性で謎多き野鳥、古来「福老」とか「不苦勞」といった縁起のいい語呂をもつ鳥を選択し、その製作だけに固執し、腕を磨き続けたこと。②その制作した可愛らしいフクロウとバリエーションの豊かさに観る人を和ませたこと。③戦術的に購入しやすい売価を設定し、その結果、幅広く多くのファンを得たこと、などが上げられと思います。

さて、小生より干支で一回りも先輩のタカハシさんが小生にとって掛け替えのない「心友」に成っていくなかで、忘れられないできごとがありました。

ある日突然「ところでよ、近いうち裏の階段入口さ、前に作ったフクロウをなんぼが並べてもいいべがあ？」という提案が出されたのです。

「道の駅五城目」の裏手には「自然観察園」という散策コースが造られており、その入口階段の両脇にお迎え用の大きめのフクロウたちを設置したい、という小生にとっては願ってもない嬉しい提案でした。

「ぜひ、よろしく願います！」と兼ねてから当観察園の整備を進めてきた一人として、その進言に頭を下げながら逆に早めの設置をお願いしたものでした。

しばらくして、休暇中の小生に「大変です!! フクロウがたくさん裏の階段に並んでます?・・・」というスタッフからの電話がはりました。

翌日、期待に胸膨らませて自然観察園に行くと、何と大小30体ほどの個性豊かなフクロウが、一斉にこちらを向いて堂々と鎮座しているではないですか!

タカハシさんに慌てて感謝の電話をしたの言うまでもありません。

「なんもなんも、ずっと倉庫さ置いておぐのもなあ・・・と思って運んでみだんだ・・・」と相変わらずの謙遜の弁が電話口に響きました。

「ながーく置かせてもらうように・・・養生してればええな・・・」と。

「うん、いやあ、ほんとにありがとう!!」

その日以降しばらくは、いつもより一層清々しい気分でモーツァルトを背に道の駅に通う日々が続いたものでした。



タカハシさんがご家族からの忠告を受けて、「あのや・・・免許証返納することにした・・・」と小生に告げたのは、彼が亡くなる1年以上も前のことでした。

そんなある日のこと、フクロウの運搬役と

なっていた小生がお宅に立ち寄った時のことです。

「ちょっと上がってお茶飲んで・・・」と、何か含んだ表情のタカハシさん。

恐る恐る居間で対面すると、いきなり「おれよ、がんだ、肺がん・・・」と。

その時の毅然として真っすぐ小生を見つめながらの告白に、一瞬、不意打ちをくらい強烈に撃ち碎かれてしまいました。

そして、淡々と「医者はやよう、すぐは死なねえ、と言ってだから・・・」と笑顔をこしらえて安心させようとしたタカハシさんらしい配慮に、一層胸が締め付けられるようで、小生は返す言葉を探しながらもしばしの沈黙を強いられました。小生はようやく「フクロウはまだまだ作れるすべえ、お願いしますよ・・・今迄みたいにもらいに来て運ぶから・・・」と独り言のように励ますのがやっとでした。

タカハシさんとのそれからの関わりは、その間に製作したフクロウを預かり、道の駅で販売するというルーチンワークで半年以上つづきました。

徐々に体調が変化していく様子を垣間見ながらのフクロウたちの運搬です。

そして、いよいよやってきます。

その死の二ヶ月ほど前、夜行性のフクロウみたいな夜遅い時間に、タカハシさんからの最期の電話がはいりました。

「いやあ、あど動けなくなった・・・もう少しがんばるや・・・ありがとうなあ・・・」。

それまでとは全く違ったトーンでした。しかし、しわがれて弱々しいやっとの声なのに、悲壮感はなく、何故か微笑んですらいるタカハシさんのイメージが宿されたその電話に、耳が凝

固し我を忘れてしまいました。

しばらく間をとり、「・・・フクロウ大事にするがらな・・・電話ありがとうなあ・・・」。

いままで何度も繰り返してきた励ましとお礼のセリフが精一杯でした。

この電話が生前最後となったフクロウおじさんとのやりとりですが、小生は、いまだにその予告された死をまっとうに受け容れられないでいるのです。



モーツァルトにおけるロイトゲープ、小生にとってのタカハシさん。

どちらも大きく歳の差は開いていますが、その年齢差を超えて「お互いに何かのために力を出し切るという泥臭さ」、「お互いの得意な能力（個性）を徹底的に引き出し、駆使して芸術的・社会的な営みをやり通そうと励むしたたかさ」といった点で相通ずるものがあるように思われてなりません。

やはり、これもモーツァルトその人から学んで来たことかもしれません。

そんなことを考えながら締め切り間近の稿を運んできました。

今日も30体の様々なフクロウたちが天空のホルン協奏曲と共に、道の駅で生き生きと健気に鎮座しております。

あの世に飛び立ったフクロウ聖人の高笑いを思い浮かべつつ、ペンを置きます。



end

映画（スクリーン）のなかのモーツァルト — その研究から —

会員番号 K.203 松田 至 弘

「映画のなかのモーツァルト」を研究し、いくつかの論考を書いてきた。その中心をなすのは、やはり映画『アマデウス』である。

ご承知のようにこの映画は、わが国では1985年に劇場で一般公開され、当時、空前の「アマデウス・フィーバー」を巻き起こし、社会的に大きな影響を与えた。

公開されて以来35年を超える月日が経過したことになるが、この間にいろいろ明らかになってきたこともあり、客観的に、また、総合的にまとめ記録しておきたいという欲求から、むずかしい研究に取り組んだのであった。



『ザ・ニューヨーク・タイムズ』1984年9月16日
(この文章は、デジタル化されたアーカイブ文書)

ところで、私たちは『アマデウス』の舞台や映画を観て、「天衣無縫で軽佻浮薄な音楽の天才」というモーツァルトのイメージを心のなかに強く印象づけられた。

特に、突然奇声を発したり、猥雑な言葉を話し、野卑でいたずらっぽい行動に走るモーツァルトには度肝をぬかれた。

*

そこで先ず、モーツァルトの奇矯な笑い声について考えてみよう。

映画を観た観客は皆、トム・ハルスが演じたモーツァルトの「あの奇矯な笑い声は一体何なのか」と思ったのではないだろうか。

残念ながら、このことについて触れた解説を目にしたことはなかったが、2018年に映画評論家の南波克行氏の書いた論文「ミロス・フォアマン—反権力と抑圧からの逃走を貫いて—」(『キネマ旬報』No.1782)に出会った。

それによると、フォアマン作品群にはよく登場人物の「狂ったような笑い」が示されているとし、「フォアマン作品で巻き起こる奇矯な笑い声は、正気と思われる世界とどうにも折り合えぬ者たちの、やり場のない言葉なき抗議だったのではないか」という見解を述べている。

思い出してみると、ピーター・シェファー作の戯曲『アマデウス』には、モーツァルトの一度聞いたら忘れようのない甲高くすくす笑い、度はずれな忍び笑い、人を小馬鹿にするような激しい笑い、うしろめたそうなくすくす笑いなど、奇矯な笑い声が頻繁に出てきていた。

改めて考えてみると、この笑いは、天才モーツァルトの人物像の特性を形づくる重要な要素になっており、フォアマン監督の映画『アマデウス』では、トム・ハルスの誇張的な演技によってさらに特徴的なものになったと言えよう。

そしてそれは、18世紀の権威主義的・抑圧的な既成社会のなかでうまく折り合えず、必死に

生きようとする自由な人間モーツァルトの道化、自己防衛（肯定）、抵抗などを感覚的、具体的に示す象徴として使われているように思われてならない。

*

次に、猥雑な言葉を話し、野卑でいたずらっぽい行動に走るモーツァルトについて考えてみることにしたい。

まず思い出されるのは、モーツァルトの最初の登場の仕方である。観客はこれを見て、啞然としたのではないだろうか。

戯曲『アマデウス』（ハヤカワ演劇文庫）によると、次のようになっている。

場所はウィーンのヴァルトシュテッテン男爵夫人邸の書斎である。鼠のまねをするコンスタンツェが駆け込んできて、ピアノの後ろに隠れると、それを捕らえようとする猫のように、モーツァルトが追いかけて登場する。

モーツァルト　ミャーオ！
 コンスタンツェ　（隠れ場所を知らせるように）　チュー！
 モーツァルト　ミャーオ！　ミャーオ！
 　　　　　　　　ミャーオウ！
 　　　　　　　　ぴょーんと飛びかかるぞ！
 　　　　　　　　きゅっと、ひっかくぞ！
 　　　　　　　　ネズちゃんをむしゃむしゃ食っちゃうぞ！　にゅっと爪で引き裂いちゃうぞ！
 コンスタンツェ　いや！

（倉橋健・甲斐万里江訳）

映画『アマデウス』では、モーツァルトが最初に登場する場所は、ヴァルトシュテッテン男爵夫人邸からコロレド大司教邸に変えられている。

そして、大司教主催の音楽会が始まろうとしているときに、モーツァルトはコンスタンツェを追いまわし、空いている部屋の机の下に隠れているのを見つけて捕まえると、サリエーリが

目撃しているのも知らずに逆さ言葉を発してちゃつくのである。

*

これらのシーンに関連して思い出されるのは、ウィーンの女流作家カロリーネ・ピヒラー（1769~1843）が、『私の人生の回想録』（全4巻、1844年）に書いているモーツァルトに関する証言である。

「……彼（モーツァルト）は突然、椅子を引き寄せて座り、私に低音部を弾き続けるよう促した。それから即興で素晴らしい変奏曲を弾いたので、そこにいた人々は息を呑んで聴き惚れた。そのうち彼はそれに飽きてしまい、椅子から飛び上がると、しばしば彼が見せる気違いじみた雰囲気テーブルや椅子を飛び越え、猫のようにミャーオと鳴きながら、ふざける少年のようにでんぐり返しを始めた。」

ピヒラーは、ウィーンの上流階級グライナー家の出で、少女時代にモーツァルトからピアノの指導を受けた。モーツァルトは、このグライナー家が定期的に関く《集い》の常連客の一人であった。

この証言については、いろいろな解釈が可能であるが、モーツァルトのあるがままの生の姿を追求しようとした作家ヴォルフガング・ヒルデスハイマーは、「客観的な真実が感じられる」と判断し、大作『モーツァルト』のなかに引用した。

当然シェフアーは、このピヒラーの文章やヒルデスハイマーの著作を読んだと思われ、それによって大きな影響を受けることになり、それが戯曲や映画の『アマデウス』に反映されたと考えられる。

『アマデウス』は、商業主義的演劇・エンターテイメントである。そこに登場するモーツァルトを理解しようとするとき、天才作曲家の個性的性格の一面が面白く強調されていることを心に留めておくべきであろう。

『チャルダッシュ』

会員番号 K.375 安藤正昭

モンティの「チャルダッシュ」を聴く機会はとても多い。

多くはピアノ伴奏によるヴァイオリンで、遅い部分はすごく情熱的に、速い部分とはんでもない速さで技巧を披露する華やかさは、コンサートのアンコールやTV番組でも人気の曲である。ヴァイオリンだけでなく、マリンバ、クラリネット、鍵盤ハーモニカから箏による演奏まであるというように、演奏家も好んでレパートリーにしているが、マンドリンの為に作曲された曲である。

20年近く前（2004年のこと）、「チャルダッシュ」の苦い思い出がある。

今、大変な事態になっているウクライナに隣接するスロバキア、ハイ・タトラス（ポーランドとの国境タトラ山脈の麓）で学会があった。学会開催期間にバンケットは恒例であるが、ヴァイオリン、アコーディオン、ベース、それに民族楽器のツィンバロンというジプシー楽団で、会場は盛り上っていた。客のハミングを聴

きとり、それを即興で見事なハーモニーで演奏するし（調とか音階どこ吹く風で）、あるいは歌に伴奏をしているうちに、会場みんなの大合唱になるという雰囲気になり酔い痴れていた。すっかりいい気分、「チャルダッシュ」をリクエストしたら、「お前、踊れるのか？」ときたものだから、狼狽えたのなんの……。そのやりとりを聞いていたチェコの女性が、機転を利かして「私に合わせて……」と手を取って立ち上がり、フロアに連れ出してくれた。

それから、どうなったか、喝采を浴びたこと以外は何も覚えていない。

「チャルダッシュ」は舞曲であり、数え切れないほど多くの「チャルダッシュ」があることを後で知った。

ハイ・タトラスで、年配のご婦人にタゴジデ（すがり付いて）踊った（？）曲は、モンティの「チャルダッシュ」でなかったことだけは確かである。

酒とモツの日々 (47)

会員番号 K.488 佐藤 滋

バルト著の「モーツァルト」を筆頭として音楽家でも評論家でもない一愛好家がモーツァルトについて書いた本が近年もたくさん出版されています。「永遠のモーツァルト」（高橋貞次：著）、「いつもモーツァルトがそばにいる」（廣部知久：著）等々。モーツァルト広場会員の松田至弘氏の最新刊もまもなく出版予定で、楽しみです。モーツァルトファンが綴る文章だけに探求的・情緒的であり、著者の思想・趣味・交遊なども透けて見えて楽しい読み物になっていま

す。そのような本の中にモーツァルトのピアノ協奏曲しか聴かない人の紹介がありました。以前だったら単なる変人として読み過ごしていたと思いますが、自分も変人になってきたせいか、その気持ちが良くわかるのです。

モーツァルトの数多い作曲のなかでピアノ協奏曲は特別な位置を占めていますし、他の作曲家のピアノ協奏曲とも大きく違っています。その違いと魅力に私が気づいたのはモネの「睡蓮」の見方が変わったのと同じ経緯でした。

今からちょうど100年前の1922年、パリのオランジェリーでモネは睡蓮の壁画を描きます。若い頃、本物が見たくてオランジェリー美術館へ行ったのですが、スケールに驚いたものの、その魅力を受け止める目はありませんでした。年をとってからモネの画集を観ていて「睡蓮」の絵は花よりも水面を見るべきではないのか？水面に映える刻々と変化する空の色、遠くの柳の枝と近くの水草、水深の色と水紋の光……。変わらない睡蓮と、変わり続ける水面。その一瞬の調和を、モネの鋭い目が捉えたのが「睡蓮」ではないか。だからモネは何枚も何枚も「睡蓮」の絵を描き続けたのではないか。見方が変わった時、睡蓮の絵は突然表情を持ち、語りかけてきました。遠くに見える柳の枝の葉ずれや、さざ波の音、鳥の声までもが聞こえてきて絵との対話が始まります。以前はすぐに通りすぎていたのに、今は絵の方から語りかけてくるのです。今、現地に行けたなら100年前の風のそよぎ、睡蓮の香りさえも感じるとることができるでしょう。年老いた今もう叶わぬことです。

モーツァルトのピアノ協奏曲もこれと同じことではないかと思えます。オーケストラの刻々と変わる転調、哀しみのオーボエ、祈りのフルート、愉快的なファゴット、優しいクラリネット、

力強いホルン、楽しげな行進曲、そしてさりげなく訪れる終焉……。そんなオーケストラの波のなかで、包まれ、翻弄され、歌い、踊り、立ち止まり、取り残されるピアノ……。ピアノ協奏曲は全27曲がモーツァルトの全生涯にわたって作曲され、独奏したモーツァルト本人を最も反映する音楽とされています。ベートーヴェンや、ロシア作品のようにオーケストラとピアノが対峙する壮大な作風でなく、オーケストラという外界の水面上に静かに浮いているピアノ。私たちの人生は映画や小説のようにヒロイックではありません。他から観れば小さな変化や失望、喜びや葛藤に懸命に対応しているのが私たちの日常です。静かに浮かぶだけの睡蓮が、その非力さゆえに美しく咲くことに心を燃やしているように、モーツァルトのピアノ協奏曲は受け身であるピアノの音の清楚な音色こそが聴き手に平安と感動を与えてくれるのだと思います。

平和が叫ばれる今、目を開き、耳を澄ますことは共生社会の大切な出発点になります。芸術が一層身近になると絵画からも音が聞こえ、音楽からも色彩が浮かんできます。一愛好家にとって色が心に響く音なら、音は世界を彩る絵の具かもしれません。

事務局より

モーツァルト広場の設立当初より尽力され、私も同じ秋田南高校吹奏楽部の先輩として大変お世話になった堀井淳司さんが逝去されました。私が秋田に戻ってきた2003年、右も左もわからないところに声をかけていただき最初に顔を出したのがこのモーツァルト広場。そこから仕事面だったりプライベートでもいい意味で連れ出してくれたとても気前がよくいつも笑っていた先輩でした。最後に一緒に

演奏したのはドヴォルザークの交響曲第9番「新世界より」。次は何をやるか？なんて笑いながら話したのは今でも忘れません。お肉もお弁当も本当に美味しかった。今はゆっくりとお休みください。これからも私たちの音楽を聴いていてくださいね。たくさんの思い出と出会いをありがとうございました。
(K575)

「モーツァルト広場」ではいつでも会員を募っております(R3年12月現在90名) [モーツァルト広場](#)

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000 (諸会費、別途) ご紹介下されば幸いです。

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058
又は 本田 (事務局) 080(1673)8322